

早稲田商学第 451・452 合併号
2 0 1 8 年 3 月

消 息

大森郁夫先生のご定年退職にあたって

私たちが敬愛する大森郁夫先生は、昨年10月に古希を迎えられ、本年3月末日をもって早稲田大学をご定年退職されます。大学の定めとはいえ、学部学生時代から長きにわたって、早稲田大学の発展、研究教育両面の充実に大きな足跡を残された先生をお送りすることには、一抹の寂しさを感じざるを得ません。

大森先生は横浜市に生まれ、東京都立小山台高校、早稲田大学商学部を経て、同大学院商学研究科博士課程在学中に商学部助手に嘱任され、以後専任講師、助教授、そして1987年に教授となり、およそ40年にわたって商学部の教壇に立ち、おもに経済学史と専門教育科目演習、他に社会経済思想史や専門外国語講読（英語経済学、ドイツ語経済学）の授業を担当されました。学外では、学習院大学経済学部の非常勤講師や一橋大学経済研究所の非常勤客員教授を歴任されました。

その間、1980年代前半の2年余りハーバード大学エンチン研究所の招聘研究員、さらに1994年度には1年間ロンドン大学歴史研究所の客員研究員として海外での研究生生活を送られました。

大学の管理・運営面では、1984年の産業経営研究所幹事（新澤雄一所長）を皮切りに、商学部教務担当教務副主任（西澤脩学部長）、教務担当教務主任（椿弘次学部長）、商学研究科教務委員（椿弘次委員長）を務めたのちに、2004年9月から2年間商学部長として商学部創設百周年記念行事の遂行にあたられました。学部長時代は、学術院体制の発足と重なり、学術院組織の構築、学部組織の見直しなどに積極的に取り組まれました。初代商学学術院長として「商学学術院の運営規約」の制定にあたるなど、現在の商学学術院の礎を築かれたといっても過言ではありません。

大森先生は学部学生時代に故入交好脩先生の下で経済史、とりわけ所謂大塚史学を学ばれました。入交先生門下からは、鳥羽欽一郎先生を筆頭に、いずれも故人となられた工藤恭吉、市川孝正、原輝史の各先生が商学部教授として教壇に立ち、先生はその末弟

子にあたります。したがって、門下からは日本経済史だけでなく経営史、日本経済論、西洋経済史、経済学史などの研究者が輩出されたことになります。

商学部卒業後、大学院進学と同時に経済学史の研究を開始された先生は、大学院在学中に当時のわが国第一線の経済学史家の指導を受けるべく、早くから他の大学院演習や研究会への参加に注力されました。最初の単著である『ステュアートとスミス』（1996年）の「あとがき」では、それらの先生方のお名前が謝辞として記されています。とくに、のちに掲げる研究業績リストからもうかがえるように、いずれもいまは亡き立教大学の小林昇教授（のちに日本学士院会員）、一橋大学の杉山忠平教授および東京大学の早坂忠教授の学恩を終生忘れえないということです。実際に立教大学大学院の小林先生の演習には、院生から助手時代の数年間毎週通われたとのことでした。したがって、学界活動はおもに経済学史学会を中心に行われ、20年以上にわたって学会役員を務められました。また、若き日のハーバード大学留学時代には、ポール・サムエルソン教授（MIT）やロバート・ドーフマン教授の経済思想史、ジョン・ロールズ教授の政治・社会哲学の講義に出席し、そのことが後々まで影響をおよぼしたということです。

商学部における先生の経済学史や社会経済思想史の講義内容は、重商主義から20世紀のケインズやハイエクに至る幅広い領域をカバーするものでしたが、本来の研究対象は経済学の誕生と関連した18世紀イギリス経済学の理論形成史といえます。1997年に商学研究科から博士号を授与された学位論文「経済学形成期における理論的諸問題の研究」は上述の著書の学位請求版にあたるもので、アダム・スミスの最大のライバルとして彼より早く最初の経済学体系をうち立てたサー・ジェイムズ・ステュアートの経済理論をスミスのそれと比較した研究です。

さらに学部長の任期を終えた後、貨幣数量説が誕生する経緯をめぐって17世紀末のジョン・ロックから18世紀後半のステュアートやスミスに至る10人の貨幣思想家を論じた『文明社会の貨幣』（2012年）が書き下ろしで出版されました。本書にたいしては、学会誌の書評で「著者の上の思いと緻密な思考力と遠目のきく構想力が合わさって近年出色のモノグラフが生みだされた」という評価が与えられました。

ここで大森先生との個人的な思い出に触れたいと思います。先生と私との関係は、私が商学部助手に嘱任された1992年に遡ります。助手として早稲田商学同攻会の担当を命じられました。当時の同攻会は、桶田篤先生が編集長、大森先生と川中子弘先生が幹事

という体制でした。『早稲田商学』や『文化論集』の編集その他の業務に関する指示はいつもの確で、仕事がしやすかったことが思い出されます。これをきっかけに、その後四半世紀にわたってお付き合いをいただきました。私が大阪市立大学に赴任した折には在外研究中のロンドンからお手紙を頂戴し、励ましていただきました。また、先生が学術院長・学部長時代には、学術院長補佐・教務担当教務副主任として仕事をともにする機会を得ました。就任初日の言葉は「責任は自分が負うので、思い切りやってほしい」というものでした。先生が大きな方針を示し、細かなところは教務主任や副主任に託すというお考えだったと思われます。教授会や学部運営委員会では意見集約に努め、公平な運営にあたられたことは特筆に値します。先生の明朗さ、周囲に対する気配りもあって、周りにはいつも人が集まってきました。多くの人が先生を頼り、相談事を持ち掛けたことと思います。私もそのうちの一人です。

このように、研究や教育のみならず、大学の管理・運営など多方面で貢献された先生ですが、若い頃よりかならずしも身体的に丈夫でなかったため定年を全うできることにある種の感概を覚えるそうです。これからもご指導いただきたいことは多々あり、先生のご定年退職後は不安でいっぱいです。商学部に残された者は、先生の思いを大切に引き継ぎながら、大学や学部・研究科の発展に努めたいと考えています。先生がご健勝にお過ごしになられることをお祈りするとともに、今後とも私たちをお見守りくださるようお願い申し上げます。代わりに、先生の主要な研究業績を列挙し、これまでのご指導に対する感謝の気持ちといたします。

著書

『ステュアートとスミスー「巧妙な手」と「見えざる手」の経済理論―』ミネルヴァ書房、vi+328p.1996.9.

『文明社会の貨幣―貨幣数量説が生まれるまで―』知泉書館、v+319+58p.2012.1.

編著

『市場と貨幣の経済思想』昭和堂、viii+259p.1989.4. 第3刷 1996.3.

『重商主義再考』（共編著）、日本経済評論社、iv+306p.2002.6.

『経済思想5―経済学の古典的世界2』（責任編集）、日本経済評論社、x+373p.

2005.7.

『経済思想 9—日本の経済思想 1』(責任編集), 日本経済評論社, xii + 299p. 2006.7.

主な共著 (分担執筆)

『基礎経済学体系 3 経済学史』, 玉野井芳郎・早坂忠編, 青林書院新社, pp.7-16, 1978.5.

『古典派経済学』Ⅲ, 早坂忠編, 雄松堂出版, pp.30-72, 1986.2.

『資本主義世界の経済政策思想』, 小林昇編, 昭和堂, pp.85-109, 1988.3.

Enlightenment and Beyond : Political Economy comes to Japan, ed. by C. Sugiyama & H. Mizuta, University of Tokyo Press, pp.171-187, 1988.3.

『経済学史』, 早坂忠編著, ミネルヴァ書房, pp.7-25, 1989.1.

Adam Smith: International Perspectives, ed. by H. Mizuta & C. Sugiyama, Macmillan, pp.293-313, 1993.1.

『アダム・スミスを語る』, 水田洋・杉山忠平編, ミネルヴァ書房, 6+259+7p. 1993.11.

『経済学における正統と異端』, 平井俊顕・野口旭編, 昭和堂, pp.33-56, 1995.4.

The Rise of Political Economy in the Scottish Enlightenment, ed. by T. Sakamoto & H. Tanaka, Routledge, pp.103-118, 2003.5.

『経済思想 4—経済学の古典的世界 1』, 鈴木信雄責任編集, 日本経済評論社, pp.1-48, 2005.5.

『回想 小林昇』, 服部正治・竹本洋編, 日本経済評論社, pp.3-17, 2011.12.

主な論文 (雑誌掲載)

「ステュアートの価格論とスミス—その価格構成論について—」, 商学研究科紀要 (早稲田大学大学院商学研究科) 創刊号, pp.67-76, 1974.12.

「日本におけるスミス研究の動向」, 週刊東洋経済・近経シリーズ No.35—『国富論』200年記念—, pp.134-140, 1976.2.

「『国富論』における〈自然価格〉と〈有効需要〉」, 早稲田商学, 第267・268号, pp.31-88, 1977.12.

「ジェイムズ・ステュアートにおける〈国民の精神〉について」, 早稲田商学, 第274・

- 275号, pp.95-119, 1978.12.
- 「ステュアート『経済学原理』における〈人口〉と〈有効需要〉—最適人口論の基本構成—」, 『古典経済学と産業』(早稲田大学産業経営研究所) 研究シリーズ No.4, pp.111-158, 1980.3.
- 「ステュアートとケインズ」, 経済セミナー(日本評論社) No.306, pp.100-106, 1980.7.
- 「端緒的均衡理論の形成」, 早稲田商学 第287号, pp.33-79, 1981.1.
- “A Methodological Approach to Sir James Steuart’s *Political Economy*”, 産業経営(早稲田大学産業経営研究所) 第9号, pp.181-203, 1983.12.
- 「D. ヒューム以前の機械的数量説—初期貨幣数量説の形成と批判(1)—」, 早稲田商学 第314・315号, pp.327-376, 1986.2.
- 「機械的数量説をめぐるヒュームとステュアート—初期貨幣数量説の形成と批判(2)—」, 早稲田商学 第316号, pp.77-125, 1986.3.
- 「ジェームズ・ステュアートにおける外国貿易とインフレーション—〈インランド・コマース〉の成立条件をめぐる—」, 早稲田商学 第321号, pp.121-163, 1987.2.
- 「スミスの経済学—〈自然的自由の体系〉の意味するもの」, 経済セミナー(日本評論社) No.519, pp.10-13, 1998.4.
- 「経済学成立期の諸問題—『ステュアートとスミス』への増補—」, 商学研究科紀要(早稲田大学大学院商学研究科) 第47号, pp.1-19, 1998.11.
- 「レジスレーターとステイツマンの間—経済学史から見た田中正司著『アダム・スミスの倫理学』下巻—」, 早稲田商学 第379号, pp.187-197, 1998.12.
- 「『〈国富論〉を読む』を読む」, 経済学論究(関西学院大学) 第67巻第2号, pp.1-22, 2013.9.

辞典(項目執筆)

- 『現代経済学辞典』, 小泉・川口・伊達・加藤編, 青林書院新社, 1978.12.
- 『経済思想史辞典』, 経済学史学会編, 丸善, 2000.6.
- 『岩波 現代経済学事典』, 伊東光晴編, 岩波書店, 2004.9.
- 『イギリス哲学・思想事典』, 日本イギリス哲学学会編, 研究社, 2007.11.

翻訳

- J. R. Hicks & S. Hollander 「リカードと現代経済学」(共訳), 季刊現代経済(日本経済新聞社) No.30, pp.24-43, 1978.4.
- C. Menard 「リカードからワルラスへーケールノーによる学史的転換一」(共訳), 季刊現代経済 No.35, pp.157-169, 1979.6.
- C. P. Kindleberger 「フランスにおけるケインズ主義とマネタリズム」(共訳), 季刊現代経済 No.48, pp.86-107, 1982.6.

横山 将義